

## 第18回白壁賞は江副康正氏らが、 第37回村上記念「胃と腸」賞は 西倉健氏らが受賞

残暑厳しい中にもようやく秋の風を感じ始めた2012年9月19日(水)、東京の笹川記念会館で開かれた早期胃癌研究会の席上にて、第18回白壁賞と第37回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。第18回白壁賞は江副康正・他「Magnifying Narrowband Imaging Is More Accurate Than Conventional White-Light Imaging in Diagnosis of Gastric Mucosal Cancer」(「Gastroenterology」141:2017-2025, 2011)に、第37回村上記念「胃と腸」賞は西倉健・他「胃上皮性腫瘍の拡大観察像と病理学的所見」(「胃と腸」46:825-840, 2011)に贈られた。

### 第18回白壁賞

司会の赤松泰次氏(長野県立須坂病院内視鏡センター)から、まず白壁賞の受賞者代表として江副康正氏(京都大学大学院医学研究科集学的がん診療学講座)が紹介された。白壁賞は、故白壁彦夫氏の業績を讃え、「消化管の形態・診断学の進歩と普及に寄与した論文」に贈られるもので、「胃と腸」に掲載された論文に加え、応募論文も選考の対象となる。今回は応募論文1編と、「胃と腸」46巻に掲載された全論文が選考の対象となった。

選考委員を代表して飯石浩康氏(大阪府立成人病センター消化内科)から、画像の質、論文の独創性、疾患の重要性、文章力、形態診断治療などの観点から厳密な審査が行われたことが説明された。次いで、本論文の受賞理由を、“わが国発であるNBIを用いて、1,300名以上を対象に行われたスクリーニングの結果、NBI拡大観察のほうが正診率が高く、さらに白色光非拡大観察にNBI拡大観察を組み合わせると100%近く正診できるという結果が得られております。つまり、生検に伴う偶発症・コスト・病理医の負担などの低減に寄与し、日常臨床に大きなインパクトを与えるものと考えます。本論文は内視鏡診断分野において、客観的に診断能を評価するという方法論を確立したとも言え、内視鏡診断学に大いに貢献したことが高く評価されました”と解説した。

「胃と腸」編集委員長の松井敏幸氏(福岡大学筑紫病院消化器内科)は、“日本で生まれた技術を日本人の手で非常に丁寧な計画を立てて長年かかって検討され、その結果が世界に名立たる「Gastroenterology」誌に受けとられて診療に応用されるという、非常に現実的な価値を生んでいただいております。よくぞこの賞に応募していただきました。おめでとうございます”と述べ、賞状と楯を贈呈した。続いて医学書院の金原優社長からは、賞金



▲祝辞を述べる松井敏幸氏



▲選考理由を述べる飯石浩康氏

50万円と、副賞として創刊号から全論文の閲覧が可能になった「胃と腸」誌の電子ジャーナルが贈られた。

受賞の挨拶として江副氏は“白壁賞という非常に歴史と重みのある、名誉のある賞をいただき、大変嬉しく思っております。この論文は、計画段階から論文発表まで4年以上にわたり、本試験を研究課題に採用いただいた厚生労働省研究班の班長である斎藤大三・斎藤豊両先生をはじめ、数多くの先生方、コメディカル、なにより研究に参加いただいた患者様方に御協力いただいはじめて辿り着いたエビデンスであります。この場を借りて深く御礼申し上げます。日本の内視鏡技術が世界に冠たるものというのはもう周知の事実ではありますが、それをもっと信頼性の高いエビデンスという形で証明できる手法のひとつである臨床試験を行う環境、土台、方法論というのはあまり確立された状況ではないと考えております。この試験がひとつの参考になればと考えております。これからも日本の内視鏡学進歩の一翼を担えるように精進して参りたいと思っております。この度は本当にありがとうございました”と述べた。

### 第37回村上記念「胃と腸」賞

次に、村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。村上記念「胃と腸」賞は、故村上忠重氏の業績を讃え、「消化器、特に消化管疾患の病態解明に寄与した論文」に贈られるもので、「胃と腸」46巻に掲載された全論文が選考の対象となった。赤松氏より受賞者代表として西倉健氏(新潟大学大学院医歯学総合研究科分子・病態病理学分野)が紹介された後、飯石氏から白壁賞と同様に厳密で慎重な選考が行われたことが報告された。次いで、本論文の概要について、“内視鏡的に切除された早期胃癌病変を対象として、治療前のNBI拡大内視鏡画像と切除標本の病理組織所見を対比した論文です。注目すべきことは、スキャナーを用いてコンピューターに取り込んだ切除標本のルーベ像を、画像編集ソフトで編集し、固定標本や内視鏡画像に重ね合わせてマッピングするというユニークな手法を用いていることです。それによって胃癌の分化部だけでなく粘液形質もNBI拡大観察によっ



▲第18回白壁賞を受賞した江副康正氏



▲第37回村上記念「胃と腸」賞を受賞した西倉健氏



▲満員の会場から拍手が贈られた



▲両氏には松井氏から賞状と楯が贈られた

て推測できる可能性がある」と結論づけています」と解説し、“解析方法がユニークであること、NBI 拡大画像所見と粘液形質の関連性を明らかにしたこと、掲載された画像が秀逸であることが高く評価されました」と賛辞を述べた。

松井氏は、“拡大内視鏡診断が非常に隆盛を極めるなか、範囲診断を超えてさらに形質発現、組織診断などにも有用であるということを証明された立派な論文であり、高く評価をされたということでございます。大変な努力の結果だと思われます。おめでとうございます”と述べ、賞状と楯を贈呈した。金原社長からは賞金50万円と副賞の「胃と腸」誌の電子ジャーナルが贈られた。

受賞の挨拶として、西倉氏は“まず、論文執筆のチャンスを与えてくださいました「胃と腸」編集委員の先生方、編集部の皆様に厚く御礼申し上げますと存じます。この論文は共同執筆者でもある八木一芳先生が代表世話人である新潟拡大内視鏡研究会で取り扱われた症例について病理学的検討を加えたものです。新潟拡大内視鏡研

究会は、典型的なものから興味深い腫瘍まで、全国の内視鏡、病理の先生方とひとつひとつ、納得のいくまでディスカッションするという勉強会です。今回の受賞は、これまでのこのような活動に対する評価をいただけたものと考えております”と述べ、さらに“私は、論文の締めくくりにもありますように、「NBI 拡大内視鏡の質的診断に関しては有用性が再確認されたものの、それはNBI 拡大観察が万能であることを意味するわけではない。NBI に依存するのではなく、他の手法も用いた総合的な所見判定や生検による診断確定が、現段階では必要不可欠」と考えております。しかし同時に、臨床医と病理医が忌憚なく意見を交わして切磋琢磨することで、こうした診断技術は確実に進歩していくものと信じて疑いません。私は病理医としてこのような役割の一端を担うことができ、大変誇りに思っております。本日は大変ありがとうございました”と述べて挨拶を終えた。

最後に、両賞の受賞者に向けて、改めて満員の会場から賞賛の拍手が贈られ、授賞式は終了した。